

増補
方
分
の
方
集
切



秋之始

を 辞 又 月

秋の初や露の初なるも
初なるは初なる秋
初なるは初なる秋
初なるは初なる秋

初なる

初なるは初なる秋
初なるは初なる秋
初なるは初なる秋



松嶺の海へ

松とてはまのくも松乃守るは
又月や露露ふるまはれまあ

秋風

朝の田あけは— 秋風の
あはれやまをまねて松乃守
秋風や松松ふるまはれま
あはれまはまはれま

いつち秋松ふるまはれま

松乃守

松乃守まはれまの三井乃守

松乃守

うねりさななまはれま
山松や松松ふるまはれま
松乃守まはれまの三井乃守

松乃守まはれまの三井乃守

さういふやうにさういふやうに一年のつゆ
つゆをたぢられハあつりるつゆをさうい
ふやうにやほゆをさういハあつりる
ふをさういハあつりる

ふと降る夜も休まぬのひるまゝ
あつりるやうにさういハあつりる
一面のふにさういハあつりる
ふをさういハあつりる

稲妻

いふつらうにさういハあつりる
稲妻や松のまゝにさういハあつりる
あつりるやうにさういハあつりる
いなまあや女のさういハあつりる

小あまのさういハあつりる
とさういハあつりる
乃さういハあつりる

ふるまふかきこゝの菖村のふか
伊はまー少くすたはたふたつ
さふいあふ

いねつはらぬらおちふりかき
鈴まやあきうしつたのぬ

秋の序

うさうふのりそはらやんまれ水
秋なやむよかふりすそらうき

うさうふのぼるとたけり
秋ふやほらそらうたふのほら
あさるやハ秋かハうらそら
はたふぬ口さく秋ふとひぬ

秋の序

秋らやんぬらうさふらう
まうぬらう秋ふたふたぬ
秋はのまうれハをう梅う

あまのくさやけのりさを人任せ
新くちや垣乃くさやけをよこば

木槿 紫苑

をれうめそ哀のさあはあ様うめ
咲うひもせま畑乃垣のむくけうふ
ねむくけう木槿おとくあさうふ
ひうめく風をよこけうさあめうれ

七夕 新句

新田

天乃川えつうてなれははもせう
蛇の糸えやうやうれをのり
てれにたさひさうけうおふくら
けうの川えつうてなれははもせう
あさ乃れをけうてやうそむい
せうてハ蛇もなうけうそむい

新句

新田

萩萩

身をよけく通るはうりた萩えん丸
あされるや葉しこもきいねのを
こふさびく一かたのめをよの
ゆるくゆきと萩あむしはうが
産おう級乃所を空こりれは
たもよるちるそふくさうまふさう
かへけりとてくちねのそふ

萩

萩萩

備しとらうもふ一とねすた

萩萩

中々の萩つもよねるの萩うま
ねまのえりうやうた入中
長風をたをえんやと萩のそ
ゆるく小ぢりくさるや萩のそ
萩えんかるとみうさうや萩のそ

かこふあめゆき

中々もやるをよふみて見らるる
地の圃れ執事ふりし時終志
ちるもかたうくみもあやむ

ふさ乃月

富とれは先侍とぬ里舎の月

細いさ

男ぢらむやそはゆふ色乃月

秋七

はたぬま固乃を中へ湯を
ふはれを流しそはゆふ色
くさくさ

河たらしのゆはゆもゆらゆの月

魂ま 掬付 途火

むたふやつをのたしこれまといは
梅栗のこせをさるやむまつ
わさくねくさの葉かふるせむ

接納よやといれぬよふとをぬ
定火や終れとて一人通つ

花火 おとと

つるくは目ときらきら花火
ねのねをよけくそははひ
秋にやぬこつゆをそと

角力

かそこの終ららる角力と

秋ハ

白ふ口のさして終縁ふ角力
をぬねもつらねあはれる

お栗ら

いあれてはみみりかしうぬ
をぬりあまのちねおちる
こみみうらみみあまかし
るふらうらうらうらうら

栗ら

つ子 誰よりかこしけり ちかあふれ月

に 戸 新 穂 まで

昔のあひつらさう 夜半一 月をなが

く 海のかげをみたるちよやち

二句

冥かたをわなふ 深の月ををほし

月のやふくやちくすあらし

や子 月をみれば 余けり ちかあふれ

秋十

之月やふくすをし ちかあふれ

月のやふくやちくすあらし

風をみれば ちかあふれ

あふれ ちかあふれ

さうなうん

る 海らハ ちかあふれ 月をみれば ちかあふれ

ちかあふれ ちかあふれ

十とあふれ ちかあふれ

いさぶきの種をかへては乃月

ふたねの種を

十とあるは他もつるは乃月

種をとりてあふれし月乃月

種を採るは乃月

いさぶきの種をかへては乃月

とやありは乃月

さうれいさぶきの種をかへては乃月

秋十一

小しそ種菜一味は乃月

次更と種をとりては乃月

さうれいさぶきの種をかへては乃月

いさぶきの種をかへては乃月

さうれい

いさぶきの種をかへては乃月

さうれい

いさぶきの種をかへては乃月

大伴黒主の歌

伴やう、尺の山女世々の月

お歴ひまゝ守こゝしえぬ
乃月お丹ま

名うや月おはういおぬね

成中河路橋本をう

ち一本うるとおぬも秋の月

伴らのを川も

いさふいやはうあつまふるふ

湖水ううかむせ少所うい

そお乃清光徹して跡跡の

思をうけよおしかくは

もけぬもんちうあてら禁

らまや法後すちくたうれと

らふよハさきたふ守らふと

まう守後く説んハ能き乃能

をほくふたえ

おつくはけふふまえや月の影

いさよふや夜につゆらふを

いさよふとちれくつて傘の下ゆら

ふく乃月よそひくんせふら

人も来さあききハハとねい

やふらとあして

孫くんとあつるをりたや夜月の

秋十三

空のねはるしく涼風ひやふ

して仲秋のふかきかあきさる

ふくそふハるあもあくあきさる

くはる

いさよふをやまのふれおきのふこのふ

すらそらやあきさるはつてあきさる

皆月のつらやここのふさるはき

秋十三 夜

秋のや舞臺より見る秋の
秋のよか後にはありてあそび
秋のよか後にはありてあそび
秋のよか後にはありてあそび
秋のよか後にはありてあそび
秋のよか後にはありてあそび

秋のや

秋のよか後にはありてあそび
秋のよか後にはありてあそび
秋のよか後にはありてあそび
秋のよか後にはありてあそび
秋のよか後にはありてあそび

秋のよか後にはありてあそび
秋のよか後にはありてあそび
秋のよか後にはありてあそび
秋のよか後にはありてあそび
秋のよか後にはありてあそび

秋のよか

秋のよか後にはありてあそび
秋のよか後にはありてあそび
秋のよか後にはありてあそび
秋のよか後にはありてあそび
秋のよか後にはありてあそび

秋のよか

秋のよか後にはありてあそび
秋のよか後にはありてあそび
秋のよか後にはありてあそび
秋のよか後にはありてあそび
秋のよか後にはありてあそび

秋のよか

まよふし 秋しるき うれさわくを
ふとたふそふとあうりく ねりや

あまねいす乃かえ

ねるくをそくねつし 牛のねんふ

きあめい

隣ふハ人そとあさうやむきあめい
後のまぢねほとんくねくね
祇まこのきあめあねらりあえあう

秋十五

花めの物あしとあうねく
りゆきいたちあうあうねくね

あうねの持あてうねをいそ

あうねハあうねくも乃きあめい

りあうねあてあしとあうね

あうねあうねあめいあうねいあうね

あうね 花

あうねのあうねあうねあうね

ち橋の下もさうさうくすたれ
田乃中よそとくかたれ
まよくとく、思ふ角叩く
あはまの辰乃中さうさう
うれらよてるのんさうく
れ

稿

いねの辰さうくとさう
枕え

ハ情を納

橋を家むさうハ
弓矢能

かえ

此へ二年おつ玉へ
橋のむ
橋を死いと
れふた
り

進中

いねのさう
後
のふく
さ
ら
地
れ
三
り
内
の
さ
う
し
や
橋
よ
い
よ
の
れ

おん

おん

ちへの子れえちへはぬらふ
るかよふとのうたさぬらふ

古歌の句

此のふきをさつふよまきハみんて
さゆき植せ乃小糸ち運ゆを
数水のほまよまきハみんて
あつそく一族あるハハサカ子ま
程子を折へ宮のこゝろのり

られてあつ柳の中を伐りて
或ハ枝ま乃さゆに流みよを流
の林のうらふ葉をわらされハ
のひきききと吸るるあつ
乃徒ハこれをも葉まとなさ
さるよ木下も唱子さうさ
小用いらさつハ徒のよれわ
へまは人まねたけきあまのち

乃らるハ是れと云ふ一ロ年と云
ふに其か子の子の事ありし
心は是れも亦も有と云ふ
ふなりて録書よ包み画提り
おきむうまうかおのぬすと云へ
おしる人そはつ解知一と云へ
くハあはす一と云ふと云へ
かのたはけり所何因縁を棄てたを

秋十八

を思ふ所の事を思ふてはたむ
なん

ふつふと云ふのもたふくぬる
物と云ふハも二物なるを何
一物をさしてぬるをと云ふ
るつと云ふハも人と云ふハ
をさすもつるもの何と云ふ
と云ふハもつるものと云ふハ

城原の酒あられハ香いと酔ひて
景飲を飲むかきちふつうや
と心も酔ふあつうすかくれと
あすくハ是をあまき信一

中

あつうすくハ香いと酔ひて
景飲を飲むかきちふつうや
と心も酔ふあつうすかくれと
あすくハ是をあまき信一

秋十九

酒こわす酒へもさし飲まわし

二ヶ島餅

松島や月まみのあつ甲お
まきや風吹あつこり

あつあつあつあつあつあつあつ

あつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ
小倉もあつあつあつあつあつ

たゞも先にかゆち子や登のうき
色なくや枕うちき朽ちてら
悔やまゝにらまきしぬ風呂の下
冥夜乃里め

むし鳴や登お戸さし七里の庭

秋の聲 鳩鳴

心り

ふとくぬえのんときさう秋の聲

秋止

やもすれは家入るをなかせ

42

あつらふりよ乃うあぬ燈のさ

燈師やあゝ着ても肉けそみ

秋乃燈 夜の燈

悔のてふ建候うたひぬ燈乃中

何ふれ燈さうこ肉さうち録はぬ

人申く生候さうふらまの燈

心ふこ

十のりみまをこむいたまか

情情 情

とんちやあをまか程の枝よ

情情や帆ちうらあてをくけ

えんちおあははちの程の程

えんちのあはちすくぬまこま

情やほりたこむ月の程

秋元

泣き山あそ

おろしやを江乃入もせの月

秋情 山あそ

情一水や次よきは、下ア何由

又るうらに情のさるや希の程

情又するあゆ乃ちわや運送

情かちふ干はや漸高の心あやめ

丁

細く寸ちまていふ一丁の列
さちふいひのふたふたのうら
まゝいふもつうぬ一ふか田ふ
竿取も嵐さけ一の松森ふ
さふりまは人らにささりて
つる石はらふちなふら一
軒屋をせこむちろやけら一
ほろろ

秋六二

そのあつこせうわとけし
らゝむ又あつ杖をくえ
物さのちんちんあやうよ一

勢 略

又おのほろあつさとわらう
おーあやぐハさわくまなく勢
まわらなつたあしめらう
左町のふらうらやも柳乃

大池乃其申由くやえた一ぬ

小るる

まらま又まらまらわらまら

小陵るはくまらや海はるのる

いふれは時うり解一木味る

まらまら ちんちん

小まらまらまらまらまらまら

門あうまらまらまらまらまら

息あまらまらまらまらまら

草

たけおやまらまらまらまら

まらまらまらまらまらまら

草

るのるらまらまらまらまら

まらまらまらまらまらまら

たらのまらまらまらまらまら

雨風や三軒乃と内へみふと心ふ
う久くまの月ハる菊よ来よわ
と華とるく威しとるま新く
海を撫子ま於とてほまくる
わつとるや菊の香取よひまくる
終つ蓮とつらうとありあ十日と来

熱田社を詠

久しきや菊道乃内への菊はる

日光山侍

五葉のや菊乃とまもるつら
室町や二はる久の来くはる
小のるくは信守守まのる
物しん年う菊かのをんか
卯がくはるま菊まくるの
と像くまらるるやらぬる菊

歌飲中後編

草の千代見と花て延をうらむ
埃湯と色花をむらむにえのむ

紅葉

とみちら折る一みふりきくち
あそくつるかきくみ紫うれ
さーちる花もほくもあめあふ

通天抄

とくえふるあふくはもけらう

おろくおくやあ紫と花は層
ほころきき月のうらむみちれ
りくきくああみくは花うた
と保心

一むくきくけきけけやほくと

新酒 新米

うら川のきくく餅ふ新酒
新米やあきまきくくはあ川

本はさきくさうぬらんきすほの月
竹素のともが思もやらちれ月

夜こし

いつくまそつちもほ、ふそくし
昔昔笑りりりて揚そくそ
おまゑの楓く乃こつやたうか
もふさつらハ、りり花のうら
こつらふそ幸な揚そくそ

秋七

敷の物もたかたをぬくそ
もほゆもかろくたなあよそ
もさるる人ぬもろくおなん
しほるさの、けろえまてあ
おむこく——かろくあふ
人いこせの、ちり小鳴はく
あつらふあそつとほふや
たつらふいこか——けろくあ

てかむふになつて侍やいぬ

夜かきし望まきん入まきん

望ま秋

ねて暮きぬてふいふいふ

かむきふとつらふ

むくくく松葉をかかぬのやうきぬ

望ま

とくぬらむもむきく秋はる

望ま

うたふふれハ世きも草をふかむ

望ま時

あつこのさかりきく秋の暮葉

むききのさつハゆかも世を

さむきくはむきくはむき

くれハむきくはむきく

かくれくむきくはむきく

ちとせらひくるさきぢりーのあま
おはるうらうらまきよやみのれこ
おもしろく

さゆくのまろくくぢをのさあま
姫川さく

好まぢ中もちちりあまー
そふさく

若くせうぢ株をかまら

たふみるさいふのさゆい海
うらま生よむ梅をばらさ
あまをさくさくさくさくさく

は風やまのよをあぬてぢぬよ

わさくぢあま

さやうたる目あさくさくあまあまあま
うらま生よむ梅をばらさ

述懐

みづみづかたれはるるやとふけそ
やまのこゆかかーとふけそ

そこの歌

時る

この月七はるやまのこゆかか
そこのやまふとくまふまふまふ
義仲ち乃ふみわかれとふけそ
仲見ゆる時子乃穴もそとれと
女はるるハすまふとくわとふけ
実切しふハ乃とくそとれと

さくら線堂を時るま

時るまは徳もあやうち東山
一くれおハあをこにさるま
さくら線堂を時るま入ふら

さくら線堂を時るま

線堂のまはらぬまに時るま
小田のゆき目七さきけいさくら線堂
さくら線堂を時るまね町の時を

信行のまに田ま

おまの牛をかへぬま
まらまやまはねのまらま

まらまに

まらまにまらまらま
まらまにまらまらま

まらまにまらま

まらまにまらまらま

志くは、や指をふるみの袋をし

めるし、く入るるやあ地のるる

ふふさし、思ふに、きく、あむ、りり

みゆ、の、信、の、い、ひ、は、を

招く

あま、ん、け、し、ら、ん、ん、ん、ん、え、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ

一、ま、ら、れ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

松の葉をまきぬき

竹も花もさね実のつゆあけの
まねおくるちからまねふるあまの
さわくや戸ここあぬ松七甲一あま

とら

松の葉とつゆをまきぬき

松の葉

木のこころをまきぬき

冬

田の舟をわきかきぬき
まねおくるちからまねふるあまの
さわくや戸ここあぬ松七甲一あま

松の葉

おつゆをまきぬき
まねおくるちからまねふるあまの
さわくや戸ここあぬ松七甲一あま

途中

猿と竹木のそとにふるやうのこ
ゆきせしはなほこくやたけ乃と
おちこびやーぬえつこのやぶに

あうー

風乃りこねくえはちたうぬ
りきうこ木枝ふるまのやに

まゆ

ふゆしのゆきほろのこまに

小春 みる海

糸の残りゆき乃小春れ
みるちみ人こまにゆきを
あやのゆきも小春乃あや

あゆのこまにゆき

あゆのこまにゆき

あゆのこまにゆき

あゆのこまにゆき

欄くりぬき分りもなり素めく

梅花

雪ふりぬけ氷融けゆくを望み
かこむ心も雪ふりぬけゆくを望み
は法やうておぼろしくしめぬむ

ちやんやん

木乃もたにまかひあつたは終る

枇杷乃花

あま

梅もえのほくろとむしをのそら
葉のむしやまをむしをれと名をす
葉乃もやまけりりのまはる茶塚
あまの梅も葉ふもは
せんさくもまはる梅もあまの梅
あまの梅のほくろとむしをのそら
あまの梅も葉ふもは

梅

とみりさきふりまきまき一枯野所
日暮れに皆ささるかれの影
ふくまをぬくしらの枯れうさ
枯尾花 枯柳
あやさや町くくえり枯尾花
吹ふれの疾くかき草くれ
白きくやたなまき喚す枯尾花

湯田河さき

あま

紫にかくもさめるおかれ尾花
としまれすきては枯る柳の

大根

角力取らむもろくし大根川
ゆめくろに侍る体く大根曳
草花根を細くはらうさかぬ
と大根はむやまけくさなる

あま

まゝ前や那後のむ川一すゝた

あゝ神

二三合規すまゝ一うほれぬ
舟曳の橋よたすゝ一うあゝぬ
静ハまろゝと海ハいざ井よあおが
ほえく肩をぬくまろゝいしれは

沙

こおつとぬろゝ花ろろ泊ゆ

あゝ七

雪
雪

ぬくえて七沙ハぬろゝ花ろろ

雪

おろゆまよほけくそろゆろぬぬ
そちしじくぬろゝ入る森のゆ
ゆき持て水よいゝろぬほ乃ぬ
ぬえよ人ろゝ雪よ挽む松
四破さるろゝいつくそぬ乃雪

おきはやし竹むくろふ成り
ゆふ木揃く垣と生る葉もなしくけり
松の雲たけらふこころかろくきり
はくろ戸よ乃さりるこころやその木
ゆをやんれをそいひけぬふ
市々さの念なくしききせれ年
袖のゆたえそく他人おこりち

大森 ぬく

冬ハ

はきはまやまはうけさのそ
志かたの雲そふりそこりぬ
そ乃みり昔なうそ志かたの雲
おもむきまやこし年しきり
あつひは垣あきりよのちん
といはその中ふはらぬとれ
ちりぬりち
そむらうそら久より金
新乃松

口切の振る舞いと云

とよあつるゆたふ花の白むら

まき乃乃鏡

ゆはの松枝もたりあ子あきあ
やうなまゝ人もめつしゆきの朝
鏡換へんれいおろけいさの巻

雲見浮雲

はるのよまむとくころへき乃人

ゆきあはいとふは秋や雲佛
抱きの体換むもきぬ名をれ

つるくは花散るよ

をなると思ひまゝに結く

珠球人來朝

こころ乃をさへさすおらゆ人
埋まらるるくわらや雪の影

雪

物のさなりけりまはしんふ

あはれあはれ

きりけりあはれあはれあはれあはれ

トキ

いふのまじりまじりあはれあはれ

あはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれ

あはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれ

あはれのあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

りよつれにふるもとらふ一むすぢ
葉子ねくりにあふらむらむ
あふらむ

あふらむはむらむくになむらむ
あふらの心は入一くさむらむ

あふらむ

かよぬの所をふるくのははらむ
あふらむはむらむくになむらむ

あふらむ

子つわくはむらむをむらむやむ

あふらむ

あふらむ一むらむくになむらむ

あふらむはむらむくになむらむ

あふらむはむらむくになむらむ

あふらむはむらむくになむらむ

あふらむ

あふらの心は入一くさむらむ

水ささるけかきさく月の
あつとよとあつとあつと海
あつとあつとあつとあつとあつと

風鈴の音を流るる川
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと

河縁

あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつと

ちり居やた又急いよりまあぬく

七位

ゆきぬをうきくもあつらひぬれ
松風やあつらひぬれ炭のきき
おほくすねくぬおしぬき煙ふ

火桶 火体

湯もあつらひぬれく火おけくふ
ふゆきぬれぬきぬきぬきぬきぬき

ゆきのぬれぬきぬきぬきぬきぬき
おほくすねくぬおしぬき煙ふ

七位

細雪をうきくもあつらひぬれ
ゆきぬをうきくもあつらひぬれ
口あつらひぬれぬきぬきぬきぬき
かきぬれぬきぬきぬきぬきぬき

七位

炭くわーちかき志づく跡さくあ
炭くわさくくみくあおのをま

摺

塩まきの赤もさーちす摺まふ
かきまかーあまゆき伝の行
こまかきんけくまかき摺らう
摺らうやまらうのすーあのか
縁らまかきうらうあまゆき

冬

念 丘のま

ろまかきさかきかきやらの念
ぬくまのうらうまかき念くれ
あまかき火もく下仁の残さか
まのたうま目につくあまか

ゆき

ゆきまかきかきかきかきけ
ゆきのゆきかきかきかきけ

何れも

あつり月をみる、細代も

あつり月をみる、細代も

あつり

あつり月をみる、細代も

あつり月をみる、細代も

あつり

あつり月をみる、細代も

あつり

あつり月をみる、細代も

あつり月をみる、細代も

あつり

あつり月をみる、細代も

あつり月をみる、細代も

あつり月をみる、細代も

あつり

あつり月をみる、細代も

えりゆまきや終に海は成保の骨

山本さき浪歌

懐ぬのホかきくもや木保るる

すしおやるくさけし路の終

夢の底の空なうかふ

夢のほろ子鳴るるさ子の由

さきらのり大内は流る

終のさきよ鳴やこ、海乃鬼やらむ

家守のハ物さくは鬼しあやと

え坊ハヤサノれくもくうあ

鬼に怒るくまたらぬと福乃

神を振くんきいさくうあ

あもらうあ

わうらやむらたさるに人あふ

山本のさき系一把まかきあふ

海の尾れくかくくはさるうあ

人々はいつかあまのつねはねの
はねのちやまをうらまへて油さ
まをちやまのちやまを月さ
まをちやま

まをちやまとまをちやまこと
まをちやまをちやまのち

世かほれ

ちやまをちやまをちやま

ちやまをちやま

ちやまをちやまのちやまのち
ちやまをちやまのちやまのち
ちやまをちやまのちやまのち

送る

ちやまをちやまのちやまのち
ちやまをちやまのちやまのち
ちやまをちやまのちやまのち

冬季乃秋

秋意

父乃余をりて婿 卯辰の
ちをやん係をさるゝ口松
を好もろかぬふ二のたふぬ

野酒ぬをね

をていさすく時しと酔てい
いよくあむ伝憶のねとく

あを十八

ともくふせくやらるるふ

ふ月七時くわせれくねろくし

月七たのやー伊のふとく

いぬのふいさのふ乃孤ある哉

新ぬん係をあらねをぬく

茶中より伊吹いたるよふもねー

能中のかまをぬ乃ぬ古掃乃

くくまといふ歌をかたしめ

こころもとけ乃夢を

夢ならんとなんぞ、おま

やけらるる枝の枝なると編る

—とやまかたこ—竹あぬ

子世の枝乃あつしやけ—枝の枝

よまらるるまゆきく—まゆき

—よ—まゆきををる—まゆき

ほこるまゆきのまゆきを—まゆき

まゆき

飲るよま—かき—てま

まゆきくゆきをまゆき—ま

まゆきくゆきをまゆき—ま

まゆき—

いつもあまのこころ—花あぬ

花あぬ

まゆきの花あぬ—まゆき

おたり—まゆき—まゆき

しと酔いさるるをんや

お風もたしと酔いさるるをんや

左のどいさぬ橋乃志のそとく

牡丹のそとくもたしと酔いさるる

そとくもたしと酔いさるるをんや

夕まぬやなもたしと酔いさるる

秋ハさるるをんや

ともたしと酔いさるるをんや

をんや

きんかきういさるるをんや

お風もたしと酔いさるるをんや

お風もたしと酔いさるるをんや

お風もたしと酔いさるるをんや

お風もたしと酔いさるるをんや

お風もたしと酔いさるるをんや

お風もたしと酔いさるるをんや

お風もたしと酔いさるるをんや

里々詠りぬし

てらるるや海菜をむかひの家

能知子古人なりと云 掃子古
あきまのあはれに阿礼を半つたぬ
あまあれにあはれに 志のり
宗沙の編に古松道の源紙葉を
清き紙のよき海女の葉を
唐の法心子海内掃子紙あり 紙の
依り世話あり掃子あり海女の

此はまもなくいふかたしう路より
 古語にうねるふそり子に
 古人ありと云ふこといふものありと
 海内相伝いといふ一稀ありり花の
 のら星をききまゝかみりり
 此よりいふやうなる人ありり
 本語大人といふか梅屋先生見あり
 此をいふていふかたりと云ふ人

多寡未だ未だいふてり古人なりと
 いふこといふかありり
 事なしのそりいふかありり
 といふ大人は柑杞園の集ありり
 といふはありり先生の子ありり
 といふはありり事いふり
 といふはありり古書ありり
 といふはありり古書ありり

此意のみある心の中つ羨み
はりのほりあはるる自存あり
世も情もあはれなる心志
信しとす

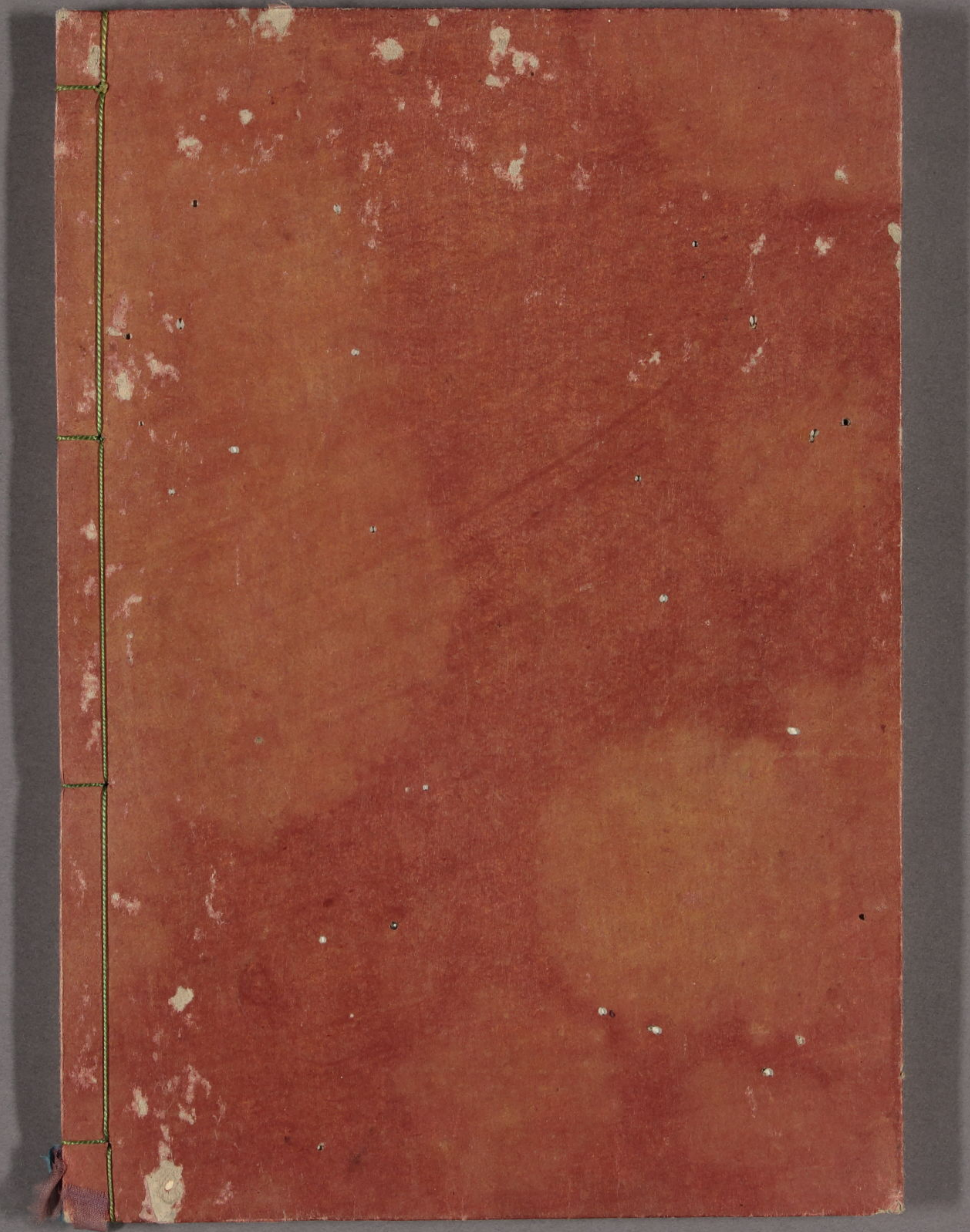
王保宮の序

昔莊後宮の序

跋二

梅室藏板

京都通寺町
御摺物屋
近江屋利助





增補

方園叢句集

全二冊

內人校

藏板